

目次

1. はじめに
2. 事後法に振り回される日本
3. 国家の価値は人民の価値なり
4. 根っこを取り戻せ
5. おわりに

1. はじめに

近年までは、ここまで「冷え切った日韓関係」は考えられなかった。民主主義・人権・法の支配等と言った『共通の価値観』の前には「竹島」等の問題等は影を潜めていた事が久しい。

だが韓国のここ2～3年の間に歯止め無きに等しい反日活動は最近になって、中国の習金平総書記と朴槿恵大統領の歴史認識を矛(鉾)にした共同行動的な傾向を睥睨できる。

中国は別として、韓国とは日・米・韓による安全保障及び防衛という共通の目標が長年に亘り追求されてきた。日・米・韓の間には「民主主義」「人権」「法の支配」という共通の価値観への信頼関係が、最も根底となる安全保障の価値共有まで及んでいたと信じられていたはずである。だが、最近激しい独特の歴史認識に基づく法的な対日対抗措置まで次々に講じられている。

2005年12月、当時の盧武鉉政権では「親日反民族行為者財産の国家帰属特別法」なるものが制定された。2011年8月には「元従軍慰安婦の個人請求権放棄は違憲である」という大法院の判決がなされ、2013年7月には「元徴用工による賠償金支払い」という高等法院の判決がある。

1965年6月「日韓基本条約」に両国は署名して、国家賠償はもとより個人賠償も含めた「完全かつ最終的に解決」されていることを確認しているはずである。

最近中国の上海海事法院が戦後補償を巡る訴訟で、商船三井の船舶を差し押さえた。日中間では1972年9月に日中共同声明を発した。これにより日中間の「損害賠償は解決済みであり、日中間の請求権問題は存在しない」というのが我が国の立場である。韓国と中国は共同歩調を取っているとみられる一端である。

2. 事後法に振り回される日本

近代法の原則には「事後法の禁止」（法律の不遡及）というのがあるようだ。だが極東軍事裁判は正に「事後法による裁き」であった。「日韓基本条約」といい「日中共同声明」と言い立派な国際的な約束である。だが、この約束を平気で破る。つまり、「事後法」で対抗しているのであり、正に近代法の放棄である。なぜ平気で国際的な信頼性まで破って我が国に対抗し

てくるのであろうか。

一般的な国際政治の世界では、永久不変の原理かも知れない「合従連衡」や「遠交近攻」、「地政学的条件」等が内在していることは避けられそうにはない。だがここで主張したいのは、事後法を平気で持ち出す背景には、厳しい国内問題が山積している事であり、内政の問題が外交の問題として現われていることである。そのために、歴史認識に於いても『避諱 (bi hui ヒキ)』がまかり通り、歪められた歴史観で貫かれているのである。「避諱」は中華文明圏に存在する儒教に基づく価値観である。林思雲博士(南京大学理工学科卒・日本で工学博士号取得)に依れば、「何故韓国人や中国人は平然と嘘をつくのか」、「韓国や中国では、国家や家族にとって都合の悪い事や不名誉な事は隠すのが正義である。そのために嘘をつくのは倫理的に正しい行為である。韓国人や中国にとって一般的な心性は、日本では全く馴染みのない避諱という儒教上の概念でくられる』のだというのである。内政問題を解決する為に外交問題に刷りかえる為に歴史も避諱で歪められ、事後法にまで発展して国際条約まで無視して法戦や歴史戦で迫る。これは中国も同じである。

ジョージ・ワシントンがアメリカの英雄であるがイギリスでは嫌われ者であり、我が国にとって安重根は伊藤博文の暗殺というテロリストであるが、韓国では英雄である事は、置かれた立場で歴史は認識されるから自然の事である。歴史とは作り話だと言われる。ナポレオン語録にも「歴史とは、**合意の上**に成り立つ作り話以外の何ものであろうか」とあるが、合意とは夫々の立場を案に慮る以外にはないだろう。日中韓三国で歴史研究をして共通の歴史観を持つなんて夢物語である。

だが、無かった事をさも有ったが如く騒ぎ立てて、嘘も百遍言えば本当になるやり方は歴史認識における合意ではなく、正に『避諱』の世界であり、世界の他国家や他民族間共通の『合意』事項ではなく、中華文明圏内における合意に過ぎない。文明の異なる我が民族に押し付けるならば、到底これを甘受することは出来ない。

3. 国家の価値は人民の価値なり(ジョン・スチュアート・ミル:1806-1873:英)

4月16日、韓国では悲惨な船舶大事故が起きた。痛ましい限りであり命を落とした皆様には、心の底からご冥福をお祈りすると共にご遺族には深くお悔やみを表しなければならない。そして行方不明の皆様全員の方々が発見されることを切に願うものである。自分の身になって考えれば「居ても立ってもおれない」大事故である。だが、平成26年4月22日付朝刊(読売)にやや衝撃的な記事を見出したのでそのまま引用する。

「6月の統一地方選挙を控え、政治家らへの視線も厳しく、ソウル市長選に出馬予定の与党セヌリ党重鎮・鄭夢準(ジョン・モンジュン)議員は、21日、息子がフェイスブックに『国民が未発達だから、国家も未発達だ』と書き込み、謝罪に追い込まれた。同党内では『このままでは6月の統一地方選は惨敗だ』との悲観論も出て居る」というものである。

この記事は決して他人事ではない。「**他山の石**」としなければならない大事なことを伝えている。近隣諸国からの執拗な恫喝を受けながらも、自主自立の気概すら欠く上に、国連で認

められた「集団的自衛権」を「保有するも行使できず」と平気で解釈して自らの首を絞め、且つ同盟国からの信頼感さえ薄めているのである。これは我が国民が下している価値観であり、同時に我が国の価値観である。

「国家の価値は畢竟国家を組織する人民の価値なり」(同上・ミル)と言い、「一国の幸運なると否とは、人民の強健なると否とになる」(ベンジャミン・デイズレーリ:1804~1881:英)・「偉大なる国は偉大なる人を出す国なり」(同左)とも述べている。所謂「国家に於いてはその国民の民度以上の人物は出ない」と言うことである。だが、戦後も70年を経てわが国民の大事なことに気づき出したのではないだろうか？むしろ、気付いてはいたが具体的な改善が出来ずにここまで来てしまったが、(勿論樂觀は出来ないが) やっと具体的な行動に着手するためのそよ風が吹き出したと言えるのではないだろうか。是非とも、『わが国民も強健』になり、普通の国際国家に脱皮しなければならない。

我が先人である内村鑑三は、「敗戦、必ずしも不幸に非ざること。国の興亡は戦争の勝敗にはよらない。『善き宗教、善き道徳、善き精神』があれば国は戦争に負けても衰えない」と(デンマーク国の話:岩波文庫)述べている。デンマークが1864年ドイツ・オーストリアとの戦争にやぶれたが、50年後には豊かな国に復興した例について語った内容の一端である。

敗戦は複数のジェネレーションまで影響を及ぼす不幸には違いないが、負けても衰えないことが重要であり、そのため欠かせない善き(宗教・道徳・精神)であることを教えている。

更に、「国家の滅亡は多くの場合、道徳の頹廃と宗教の軽侮の次に来る」(ジョナサン・スワト:1667-1745:英・ガリバー旅行記の作者)とか、「一国を滅ぼすのに刃物は要らない、その民族の記憶(歴史)を消し、その上に新しい歴史を捏造(発明)して、これを押し付ければ足りる」と言う箴言もある。所謂、「根っこ」を切れれば滅ぶが取り戻すか残った根っこを育てれば回復すると言うことである。

4. 根っこを取り戻せ

(1) 在日米軍の部隊章にみる日本の根っこ

我が国の歴史や伝統・文化・道徳・精神・宗教等は正に我が国わが民族の根っこであろう。在日米軍の部隊章を見るに「富士山と鳥居」でデザインされている。二つとも我が国のシンボルと見たのではないだろうか。世界遺産の富士山は正に日本人の心の中に染みこんでいる。では鳥居は神道のシンボルであるが、我が国のシンボルと見ているのだろう。確かに、神棚と仏壇がある家庭は多い。神社もお寺もお参りするしクリスマスも祝う。『本地垂迹(スイシャク・スイセキ)説』所謂『神仏儒(道)習合』により日本人は異なる宗教が交じり合いながら、何の蟠(ワダカマ)りを持たない。そこに着目したのがハンチントンであり、文明の衝突の中で世界7大文明の一つとしての日本として、新たな世界を創り出す可能性を主張しており、「世界へ向けた文化の再生に日本人は目覚めなければならない」と述べている。「国際人としての情緒原理/行動原理主義的日本人が、自然への意識に根ざした仏教や儒教などよりも古い時代を思わせる」ものこそ神道であることをハンチントンも指摘して居る。

(2) 武士道に見る根っこ

あの「武士道」を著した新渡戸稲造は、「宗教がないとは。いったいあなた方はどの様にして子孫に道德教育を授けるのか」と問われ、即答出来なかったことが、武士道を著すきっかけとなっている。「彼に勝ち、己に勝つ、強じんな精神力を鍛える」という道德観念こそ武士道の特性を現わしている。そこには仏教から禁欲的な平静さや制への侮蔑、死への親近感などをもたらしたと述べ、道德的な協議に関しては孔子の教えが(武士道に対して最も豊かな源泉となつてると述べている。神道については、主君に対する忠誠や先祖への崇敬更には孝心等の教義が教えとなっていると述べているのであるが、神道の教義は、日本人の感情生活を支配している二つの特徴、乃ち愛国心と忠誠心を併せ持っているとして述べている。「だが神道は論理的な思考を持った人から見れば、混乱していると考えられるに違いない。その上に、**民族的本能や種族の感情の枠組みとしては、神道は必ずしも体系的な哲学や合理的な教学を必要としていない**」とも述べている。

ここにこそ仏教や儒教より前の古来から根ざした自然への意識が民族性の中への定着を見出すことができる。

(3) 作法・マナーに見る国民性・民族性と根っこ

国民性について語るとき何を基準に語るかはかなりの熟考を必要とする。「而今の会」と言う学びの場があるが、ここで行われている京都を根拠地とする『礼(いや)のこと教室』主宰の教えである『礼儀・作法』から若干感じるところを述べたい。

講師の森 日和先生は、林平馬著「大国民読本」(昭和2年)の「国の定義」や「国が亡ぶとは」などを引用して話を進められた。

『国が亡ぶとは国民性を失うこと』である。国民は一瞬犠牲を払わなければならない。国民性を失わないためには「国語」+「型による伝承」が重要である。公の幸せは個人の幸せであり、個人は細胞であり国家は身体の様なものである。個人主義は国家主義であり決して利己主義ではない。個から国家へ、国家から世界へ、奢らない日本、この国民性こそ失ってはならない国民性である。「伝承」や「しきたり」の様なものに見えないものを観たときに人間が磨かれる。伝承やしきたりに意味のない物はない。命は生きるための知恵であり、自分を知ることにより(自知)自分が誇らしくなり(自尊)自分のあるべき姿が自ずと見えてくる、そしてその姿の通りに生きる(自制)ことができるようになる。自制できない人は自尊ができていない人だという。礼(いや)のこと教室の主宰の結論は、『**民度・マナー・作法こそ日本らしさを伝える役目を果たす**』とおっしゃる。

『日本人としての作法心得のこと』において未だ僅かに2回だけの受講に過ぎない中から一例をご紹介しますと思う。

- ア. 祝祭日は重要な学びの機会であるが祝祭日が Happy Monday 化してしまった。例えば成人式は人生の通過儀式である。**人生の覚悟を持つ機会** であり当たり前の人になること。
- イ. 良かれとして貰ったことを学ぶ機会にする。「〇〇の所為で」から「**〇〇のお蔭で**」、**に感情を変える機会である。**

- ウ. 命とは、命・魂・生きること・生きるための智慧である。命を繋ぐ事の場合は「家庭」である。個人の家が過程であるから女性がしっかりしなければならない。「国家」は国の家である。
- エ. 食事は命と向き合う場である。命をつなぐために命を頂く場であるから手を合わせて「(命を)頂きます」と言うことである。和の精神から言えば、命を頂く場であるから食事の間は「喋らない」「テレビを見ない」のが正しい。噛むときは箸をおいて手は膝に置く。噛んでいるときに話しかけられたら噛むのを優先する。命と向き合う場だから飲み込んでから話す。一方、「食事はコミュニケーションの場である」という考えもかなり有力である。因みに、北の方では味付けが濃いのが、これは寒い地方では塩分で体温を上げる知恵だという。マナーの意義を知った上で一部でも取り入れることができれば国民性や民族性を感じながら豊かな食事ができるのではなかろうか。
- オ. 作法は手段である。奥行きのある話である。大和心は感じることであり、和する心は和せる・誇る・愛するに通じ、「心の輝きが体の輝き」に通じるのである。
- カ. 型に心が顕われる。日本人は心のフィルターが柔らかい。清浄感は物事を美しく見る事に通じ、あのことがあったお蔭でとなる。白い紙・白い服・白い箸(柳箸)・白木(柳)、箸の最上格は柳箸、次いで割り箸となり、清浄感を大事にする心の現われである。筆記具の最上格は筆であり筆跡の陰影を大事にすることに通じ、弔事の表書きは薄墨であり、涙で墨が薄れたという、言葉に頼らず相手の心に寄り添うのである。型は先人の智慧であり心を以て思い出すのである。
- キ. 技の奥には心がある。扇子は挨拶の前後に扇子を膝の前や、自分の前に置くことで相手への敬いの念を表す作法であり、相手との間に線を引いて、決して相手の境界線を侵さない距離感を置くことであり、恐れを知り一歩下がって自分を謹むことである。
- ク. 礼儀作法は「**心と型の顕われ**」である。襖の開け方・お辞儀・箸使い・椀の蓋の開け方・おせち・江戸しぐさ等の中には正に日本の国民性や民族性に繋がる根っこを見ることが出来る。個性発揮しながら、他人をびっくりさせない、他人の心を動かさない思いやり、和する心、空気を読む、・・・様々な日本の礼儀作法こそ『おもてなし』として相手を満足させる『**無形の財産**』となっている。これが自然の形で躰に繋がっていくならば日本を取り戻す側面ともなるだろう。因みに躰は、型に囚われず状況・状況に合わせて身を美しくすることである。

5. おわりに

韓国の船舶事故は悲惨であった。報道(4. 22付読売新聞)によれば、韓国の中央日報は19日の社説で、「韓国は『三流国家』だった」と断じ、21日にも「政府の災害対応能力があまりにも簡単に限界を見せた」と指摘した。21日に朴槿恵大統領は、逮捕された船長らが乗客を置き去りにして逃げた点に触れて、「常識的に見て、到底納得できない殺人に等しい行為だ」と非難した。又、同紙は韓国では1995年、ソウルの三豊百貨店が崩壊し約500人が

死亡した際、当時の金泳三大統領は「大統領に人徳がないから事故が起きた」との批判まで飛び出し、人気下落した。と報じている。中央日報は又、「私たちは(窮めて短時間での)圧縮成長に成功したが、生命や安全の価値には無関心だった」と問題を提起。東亜日報は、事故の起きた16日を「安全国辱の日」とし、「**恥ずべき国を次世代に引き継いでではない**」と強調したと報じている。

『善く兵を用うる者は、道を修めて法を保つ。故に善く勝敗の政を為す』(孫子第4形篇)
これもまた、他人事ではない。他山の石としなければならない。我々も又、ひしひしと迫る脅威や恫喝に対して自らこれに立ち向かう気概を失い、同盟国に頼るような国民のままに子孫に引き継いでではない。集団的安全保障を常識とする昨今では、同盟国や友好国との信頼関係を促進できる『法制を整え』、軍事的な常識に基づく『交戦規定』を準備しなければならない。情報や兵站面での共同行動が可能とする協定が進められる中で、平時はもとより、有事に合理的に機能させるためにも、例えば『集団的自衛権の行使』は不可欠である。「避諱」を駆使して歪めた『歴史戦』や平気で「事後法」をかざして迫る『法戦』に対しては、日本人・日本民族の『根っこ』を取り戻し、身に付けて毅然として『理論戦』・『広報戦』・『法戦』で臨むべきである。

これらが合理的に、そして適時適切に機能する国家になった時に初めて、内外に対して我が国の政治は信頼され、国民も世界に信頼されるだろう。正に「国家の価値は畢竟国家を組織する人民の価値なり」であり「一国の幸運なると否とは、人民の強健なると否とになる」そして「偉大なる国は偉大なる人を出す国なり」を『地で行く国を次世代に引き継ぐ』ことができるだろう。最後に諸外国の支援も受けながら、韓国船事故による行方不明者の一刻も早い発見がなされる事をわが身に置き換え切に祈念する次第である。合掌。